

癒しの大学開放—「私らしさのワークショップ」から

徳島大学大学開放実践センター 西村美東士

1 癒しのサンマ

ぼくは自著『癒しの生涯学習—ネットワークのあじわい方とはぐくみ方』（学文社、1997年4月刊、1998年3月増補）において、癒されるためには、①自己決定の水平異質交流のサンマ（時間・空間・仲間の3つの間）において、②他者とともに信頼・共感の居心地のよさを味わいながら、③社会貢献も含めてボランティアに共生創造主体として生きる、以外に方法はないと主張した。個人が傷つき続ける現代日本において、人間が癒されることの意義の大きさを、大学教育側は十分理解する必要がある。最近の悲惨な暴力的事象を考えても、逆に市民の自己決定活動などにおいて見えてきた共生への展望を考えても、である。

2 大学でこんな楽しいことをやってよかったの？

公開講座「私らしさのワークショップ」の趣旨は次のとおりである。「現代人の生涯学習に向かう主要な動機の一つとしての『自分らしさ』への願いを取り上げ、ワークショップ形式により（集団一斉承り型ではなく）、参加者一人一人の臨床的現実を引き出しつつ、生涯学習、ボランティア活動、市民活動等の自己決定活動のあり方を明らかにする」。ある受講者は「大学でこんな楽しいことをやってもよかったの？」という出席ペーパーを提出した。なお、講座閉講中も自主的な集まりをもった。大学教官の研究室や、ときには自宅にまで押しかけて

自然体の交流をするという現役学生の特権を、市民にも味わってもらった。

3 問題提起-問わされる教育を超える

1997/6 中央教育審議会答申「21世紀を展望した我が国の教育の在り方について」は、教育を「自分さがしの旅」をたずける営みとした。たしかに「本当の自分とは何か」を自ら問うように仕向けることは教育の目的である。しかし、本人の幸福追求にとっては、もともと「空白」である「本当の自分」を、教育によって輪をかけて問わされつつある現状は望ましいことなのか。しかも「見られる自己（の肥大）」から「あるがままの自分であれ」へと転換したメディアからのメッセージがこれに追い討ちをかける。

人びとの「自分とは何か」という問いは学問に向かう重要な内発的動機である。しかし、本人の学習欲求に基づいて支援すべき教育の側は、もともと「空白」であるものを確かな「何か」という手持ちがあるように見せかけたり、ましてや「今のあなたは本当のあなたではない」などと脅迫したりしようとする誘惑を自ら厳しく断ち切ることが求められる。ぼくは「学習指導者」として、せめて気づくこと以前に癒されることを大切に、建設的な相互批判より以前に自己とは異なる他者に対する共感的理解を先行させる態度を貫いた、つもりである。しかし、上の誘惑を超える魅力を指導者自身が感じられるような「私らしさ」支援のあり方はいまだ不明である。

癒しの大学開放

ー「私らしさのワークショップ」からー

日本社会教育学会第46回研究大会

平成11年9月11日 13:30-14:00

自由研究発表(学習活動・教育事業Ⅰ)

徳島大学大学開放実践センター助教授

西村美東士 (mito)

[ねがいはいはこれかな?]

「**個の深み**」と出会う

趣旨

大学が現代人の自己決定を支援する

mito 「現代人が求める人間関係＝信頼と共感」

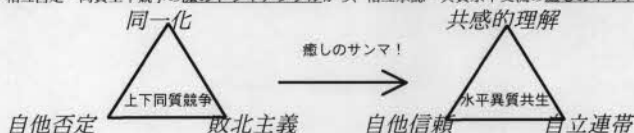
＝水平異質共生による癒しのサンマづくり

生涯学習は、人から学ぶこと、人と出会うこと！

(富田富士也「人は人に傷つき、人に癒される」)

[求められる3つのちから]

相互否定・同質上下競争の魔のトライアングルから、相互承認・異質水平交流の癒しのネットワークへ



mitoの連絡先

ホームページ <http://ha5.seikyou.ne.jp/home/mitochan/>

電子メール mitochan@ha5.seikyou.ne.jp

研究室 (ファックス兼用) 088-656-7284

[みんなちがって、みんないい]

わたしと小鳥とすずと(金子みすゞ)

わたしが両手をひろげても、
お空はちっともとべないが、
とべる小鳥はわたしのよう、
じべたをはやくは走れない。

わたしがからだをゆすっても、
きれいな音はでないけど、
あの鳴るすずはわたしのよう、
たくさんうたは知らないよ。

すずと、小鳥と、それからわたし、
みんなちがって、みんないい。

[あなたはあなた、私は私]

ゲシュタルトの折り(パールズ)

私は私のことをする。

あなたはあなたのことをする。

私は、あなたの期待に沿うために、この世に生きているのではない。

あなたも、私の期待に沿うために、この世に生きているのではない。

あなたはあなた、私は私である。

しかし、もし、機会があつて私たちが会ふことがあれば、それはすばらしい。

もし出会うことがなくても、それはいたしかたのないことである。

“癒しのサンマ”について

自著『癒しの生涯学習』より

mito

癒されること

自著『癒しの生涯学習』の主題である癒しについては、「人間はなぜ生きるのか」という問いへのもっとも有効な答えの一つが「癒されること」であるという気持ちで本書を書き通している。しかし、同時に、本書では、癒されるためには、

- ① 自己決定の水平異質交流のサンマにおいて
- ② 他者とともに信頼・共感の居心地のよさを味わいながら
- ③ 社会貢献も含めてボランティア（自発的）に共生創造主体として生きる

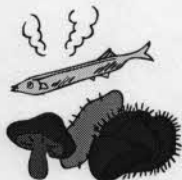
以外に方法はないという主張もしている。ただし、それは、「自分のために」「面白いから」であり、本書ではそう思えるためのコツを探ろうとした。

癒しのサンマについて

‘サンマ’とは時間、空間、仲間の3つのマ（間）のことで、本来は、子ども会関係者などが‘今の子どもにとって「遊びのサンマ」が欠けている’’と提起したときの言葉である。たしかに、今の子どもたちは、与えられた課題をこなす時間の過密化による自由時間（時間）の不足、冒険できる場（空間）の不足、群れて遊ぶ友達（仲間）の不足にあえいでいる。しかし、青年や大人たちはどうだろうか。子どもたちと同様にサンマの不足にあえいでいるではないか。ゆっくりしたい、自分らしさを取り戻したい、本当の友達がほしい……。ぼくはそこで現代人が求めているものを「癒しのサンマ」と呼ぶ。サンマであるから、日常の家庭、学校、職場のすべての時間を癒しの時間に当てようというわけではない。せめて1週間に1回くらいはサンマがあって、「ああ、〇曜が近づいてきたな」と思えるだけでも、その1週間を元気に暮らせると思う。

集団学習について

集合学習のうち、団体活動や学級・講座などの学習者同士の相互教育が期待される学習方法。集団というと全体主義的なマイナスイメージもある。現代青年が求めているのは、集団というよりもゆるやかな人間関係のネットワークによる癒しのサンマなのだと思う。



1 「私らしさ」のパラドックス

(1) 距離を保った親密さ

若者たちは、本名も顔も知らないのに親密になれるなど、従来の浅い/深い、素顔の自分/仮面の自分、という枠組では理解し得ない新しいコミュニケーションをインターネットを通して行おうとしている。このコミュニケーションのプラス面は、一言でいえば「状況主義的自分らしさ」（自己の複数性）の許容である。「本当の自分」とはそもそも空白に書き

(2) 「状況主義的自分らしさ」の受容を

しかし、せめて教育においては、このコミュニケーションを通じて「状況主義的自分らしさ」を許容したい。これにより、従来の教育が否定してきた「後向き」の態度も受容でき、また、「今のあなたは本当の自分ではない」という脅迫じみた行為も回避できよう。一方、若者たちは「自分はこうだ」という勘違いから自由になれる。インターネットであれば、今までとは違いう世界に飛び込むことに多大な勇気は必要ないからである。世界が広がることによって、今まで思い込んでいた「自分」というものから解放される。

逆にこのコミュニケーションのマイナス面は、それが無意図的に行われている場合は、本人が求めていたはずの「距離を保った親密性」ではなく、現代社会一般にはありがちな回避したかった関係、すなわち、内面まで踏み込んでくるからうざったい、あるいは逆に、距離があるからわかりあえない、という感覚をもたらすものになってしまいうことが実際には多いということである。これでは「ヤマアラシジレンマ」や「みんなぼつち」が再認識されるだけの結果になってしまふ。その端的な例が多様なネチケット違反であり、いまだ絶えない「悲しみの性」である。

これに対し、今後の情報処理教育は、同一化志向のピアコンセプトから彼らを解放し、信頼と共感に基づいた人間関係の味を伝え、対メディア批評精神を保持しつつ使いこなすネットワークワーカとしての資質

2 「後向き」の肯定

(1) 生産性及び変身の強迫観念からの解放

転職のことですか、僕は事前に正式に就職しなければなりません。でもなんか就職してしまうと大切な何かを失ってしまうよ……。それが何かははっきりと分からないけど両親はおまえはだいたいお損しているってボーナス期になるといふけど（私はボーナスがないので）世の中お金じゃないかと思うし、失って負け惜しみじゃない。結局自分が納得した人生を送りたい

(2) 後向きを否定しないで＝積極・消極の自己決定の尊重

よくいわれることで、「最近の若い人は積極性が無い」、「気まぐれで信用できない」というのがある。しかし、注意深く個人を見てほしい。必ずしも、いつも後向きというわけではない。逆に、大人だって、だれだって、どんな状況でも積極的ななどという人はいない。もし、いるとしたら、その人はむしろ積極、消極を自己管理できているから、とさえいえるかもしれない。

自己決定活動のエネルギー消耗について、多くの関わっているメーリングリストから。

「やりたくてやること（楽しいこと）に使うエネルギーと、あんまり乗り気じゃないけどやらなくちゃいけないからやること（楽しくないこと）に使うエネルギーがある。たとえば、人に会いにいくって、かえって

込んでいく性格のものであるし、それゆえかなり歳をとってから気づくとしたら、それでもよいものなのかもしれない。それなのに、現実の社会は、就職時にはさっさと会社から「エントリーシート」を書かされ、「自分とはどういう人間なのか」という箱に入れられてしまふような社会である。また、若者たち自身も、その多くが「世間からよく思われたい」という理由で、そういう社会に無理に順応しようとしている。

を身に付けるようになることをめざす必要がある。

たとえば、掲示板で他者の秘密を暴露してしまうようなテクノな若者たちがいる。これに対して、いくらか机上でモラルやマナーを習得させようとしても効果はないだろう。彼らも根からの悪人ではあるまい。むしろ、彼らの可能性を信じて共感的に接し、彼らのテクノロジー能力を活かし、自信につなげてやる教育のプログラムにする必要があるのだ。

そのための教育のあり方として、次のような節度が考えられる。メディアを通した共感的な相互理解→自己受容の体験→基本的信頼の獲得→支持的風土の形成。これにより、自立（適度な距離）と共有（親密さ）を身に付けて生涯学習社会あるいは共生社会を楽しむ生き抜くことのできる人材が養成できると考えられる。

なお、具体的教育方法に関しては、ほぼは情報処理教育のワークショップ型への転換を模索しているところである。これにより、「距離を保った親密性」や主目的の学習・発信能力が実現できるのではないかと。

注 本発表については、ほぼも所属する青少年研究会でとりまとめた富田典典・藤村正之編「みんなぼつちの世界—若者たちの東京・神戸90・展開神—」（恒星社厚生閣、1999.5）に大いに示唆を受けた。また、徳島ヤングフェスティバルの川田春夫さんとおしやべりがとても参考になった。

（以上は平成11年度情報処理教育研究集会発表予定）

と思う。偉そうなこと言えないけどそんなわけで先生のアドバイス そうそう、その調子。なにも自分を無理して変える必要はないんじゃないかな。は、心は、なかなか軽くなりました。感謝、感謝。ただ僕は、生き生きと生きたい。人生は難しいけどなんか楽しいです。それではまた。（受講者のメールより）

うまくいなくて落ち込んだりする。それをまた、しばらくして気を取りなおして、違う人に会いに行く、そんな感じときのことです。

人に会いに行く…エネルギー消費量・小/気分・楽しい。→落ち込んだけど、気を取りなおす…エネルギー消費量・大/気分・楽しくない。→違う人に会いに行く…エネルギー消費量・やや大/気分・やや楽しい。

この「気を取りなおす」前の落ち込みにあるとき、それを静かに受けとめている彼は、たとえ外からは後向きに見えても、個の深いプロセスにいるのである。そういうときは、徹を飛ばしたりせずに、そっとしておいてあげてほしい。

違う若者のメーリングリストから。今度は女性。し

なやかでたくましく。

「エネルギーの流出に神経質になると、小さなことに感動できるようになります。道端の花の色とか、空気に混じる匂いとか、友達が何気なくいった言葉とか。そうした感動をコツコツため込んでいるうちに、ある日いきなり復活の日が訪れます。復活の呪文はいたって『あーっ、もう、めんどくさい!』。何のことはない、落ち込んでいる自分自身に飽きるのです。」

3 自己決定活動の傷と癒し

(1) 人生の風景を味わうか、味わわないか。

ぼくは教育の根拠を憲法13条の「幸福追求権」においている(p132)。法学の世界では、この13条が「自己決定権」と関連で論議されるようになってきているようだ。

ぼくは1998年3月まで昭和音楽大学で社会教育主事課程を教えていた。

チエちゃんという学生は、短大に入学してすぐの頃の最初の授業で、講義が終わったとき、ぼくのところに来てこう言った。

「m i t o ちゃん(ぼくのこと)、わたし、いい女になるつもりだからよろしくね。」

ぼくは、これはすごい人が入学してきた、と思った。大人の女でも、ふつう、どこかにいい男がいなかしら、となるものである。それに対して、18歳のいわばまだ「小娘」であるはずのチエちゃんが、きちんと自分自身の成長に希望を持ってまっすぐに目を向けているのである。このように自分にきちんと目を向けられる人は強い。思ったとおり、彼女は声楽家の卵としてもずば抜けた成長を示し、現在、憧れのオペラの舞台を目指して一生懸命生きている。

チエちゃんが2年になったとき、また、「ねえ、m i t o ちゃん、わたし、すごいこと思いついちゃった」と呼びかけられた。こういうことは、青年期真最中の多くの学生にとってよくあることなので、ぼくはいつものように「なあに」とふつうに応じた。

彼女がそのとき言ったのはこういうことである。きのう、うち(この場合は下宿先)に帰る途中、これって人生みたいだな、と思った。おうちが「死」であるとする、それに向かって歩いていくのが人生だ。

彼女は青年期真只中だから、やはり生きることとは、とか、死ぬこととは、とか、まともに考える時期なのだな、とぼくは思った。しかし、彼女の話は次のように続いた。

おうち=死に向かって帰るとき、二つの帰り方がある。ひとつは、おうちだけを目指して、寄り道もしないで、まっすぐに効率よく歩く帰り方だ。そういう人たちはあざ笑ったり、ましてや責めたりする気持ちはまったくない。でも、自分自身ほもうひとつの帰り方をしたいということに気づいたのだそう。それは、友だちのところに会いに行ったり、途中の森に入り込んで散歩してみたりして、「人生の風景を味わいながら帰る」という帰り方である。

ぼくはこれを知いて、それが大きな発見であることを認めた。まさに自己決定の人生のあり方ではないか。

(2) 自己決定活動における癒し

ぼくは、人びとを癒されたい状態に追い込む「上下同質競争社会」において、癒しを提供する「水平異質交流」を生み出す時間・空間・仲間(3つの間でサンマ)というが突発的に存在していると考えている。それは、自己決定のサンマとしての①生涯学習、②ボランティア、③地域活動(市民活動)の3つである。そ

どんな状況でも面白がることさえできれば、パワーに変換できるんだと思います。」

後向きになっているときも個人にとっての大切な時間なのだ。また、森田正馬の臨床心理学では、彼女のいう「ある日いきなりの復活」を「流転」と呼び、「気になることは気にすればいい」と説いている。状況による後向きさというのは、じつは生産的な生き方のひとつだといえよう。(自著『癒しの生涯学習』)

そして、生涯学習やボランティア活動、市民活動などは、そういう「自分がやろうとしてやる」自己決定の活動である。ほんとうに自己決定で生きることができている人は、たしかに、そうでない人からといって、干渉したり、とやかく言ったりしないものだ。そういうことで、つたつと説明しきれている。多くの人がそうありたいと思っている当たり前のことだが気づかない「自己決定」のあり方を、チエちゃんははっきりと示してくれたのだ。

ぼくは、その後、すっかり、この話を授業やいろいろな講演などでしゃべらせてもらっていた(もちろんチエちゃんの話という前置き付き)。青年教室にときどき顔を見せていたチエちゃんが、それを聞いて、ある日、二次会の席でぼくにこう言った。「m i t o ちゃん、わたしの話、ほかの人にどんどん話していいわよ。でもね、私がそのとき言ったことで一番大事なことを、m i t o ちゃんは忘れたの。すなわち、「エネルギーを使うけど」という前置きの言葉を、「人生の風景を味わって生きていきたい」という言葉の前につけていたはずだ。それが大切な発見だったのに、とぼくは注意されたのである。

そうだ。自己決定の活動をしようとする、と「効率よく生きる」とは違って、多大のエネルギーを消費する。自分がやろうとしてやり始めた生涯学習活動なのに、人と出会うことによってかえって自分自身が傷ついてしまったり、専門の世界を歩いているうちにさ迷い込んでしまつて、自分がその世界のどこを歩いているのかわからなくなつてしまつたり……。自己決定の人生や、自己決定の生涯学習活動というのは、「エネルギーを使うけど」という前提も含めて自己決定することなのだろう。

ぼくの追加意見も述べておきたい。ぼくはチエちゃんみたいな人たちに、たくさんエネルギーをもらって生きていけるけれど、それでも元気がなくなるときもままある。そういうときに思う。人には「エネルギーを使うけど」という前提そのものがしんどいときがある。そういうとき、自己決定活動の場合なら、深くお休みさせてもらえばいいのだ。それは、自己決定活動が元気にできている人からは、けっして非難されたりすることはないだろう。そのことはチエちゃん言葉が保障してくれている。(自著『癒しの生涯学習』) mito大学のアカデミズムは、この自己決定を支援するものでありたい。

ここでは、「仕方ないから頑張る」などというぼくたちのいつもの奴隷の習性などはいらない。そういう人がいたらかえって邪魔になる。自立した者どうしが相互承認しあい、あるがままの自分を肯定的に受け入れあって(自己受容)、のびのびと異なった個性を育くみ、発揮しようというところがサンマの魅力なのであ

る。さらには、そこで、他者や社会に貢献できる有用な自己を再発見し、また、他者からその認知を受けて自他への信頼を深め、個を深めることができる。本書では図表1(略)のような好循環が成立する。本書(自著『産しの生涯学習』)では、このような現代のリア

4 技術屋としての大学への期待—会社のためではなく、自分のため

技術屋が個人として学びたいこと

川田春夫さんは10年以上勤めた会社を今年、退職した。去年のヤングフェスティバルで仕事がなごりになりがちで、会社や顧客に迷惑をかけていると感じたからだ。一番勉強したのは、電気工事施行管理技士資格取得(1級)のときだそうで、ヤングフェスティバルと同時に集中して勉強した。その次が徳島大学工学部への編入のときで、10日間ほど集中して勉強した。また、夜間部のときは、各専門分野の仲間が集まって、夏休みに編入をめざして勉強会をした。彼は数学を教えた。夜10時までみっちりやり、それに降切り上げて毎晩のように遊びに行った。楽しかったと彼はいう。

しかし、コンピュータのハード、ソフトなど、どんどん新しくなるので、独自の勉強だけでは追いつけない。教材も手に入らない。とくに徳島では、技術が陳腐化しており、リニューアルが必要と彼はいう。

彼は自治体のある講習会に私費で申し込もうとしたことがあるが、企業からの参加ではなく、個人参加であるという理由から断られた。その講習は企業を育てるという目的で開かれているからだ。彼はいう。自分は、技術屋個人として勉強したい。

必要になったときは、今でも徳島大学に当時の化学の先生を訪ねて、食品工業の生物制御などについて教えてもらっている。自分より下の世代はそういうことはしていないのだが、自分たちの世代は、忙しい先

5 裏講座・フリースペースの存在意義

(1) 「学生の特権」の市民への開放

ぼく個人としては、大学教官と時には酒も交えて自由闊達な知的議論をするという学生だけの特権だった喜びを市民にも「開放」するということは、少し大

(2) 自然体の交流

キャンプは夜だ

過去の青年教育においては、サークル等の目的集団に対する青年団等の生活集団の意義が叫ばれたことがある。そこでは、生活に根ざした総合的な人間交流の意義があらためて評価されていた。もし、そういう人間交流が可能になるならば、それは上流社会の一端に風穴を開け、人間解放のユートピアを実現することに近い。しかし、これといった具体的な到達目標を持たずに、生活のなかでの人間交流のものを目的とする試みなどに現代青年が関心を持っただろうか。私たちのそういうために答えを出してくれるのが、キャンプであり、キャンプの夜であり、キャンプの夜の「空白のプログラム」なのである。

そこでは、気楽なおしゃべりや打ち明け話のなかに、一人ひとりの生活文化が自然にしみだしてくる。共通の文化の確認も楽しいが、異なる文化との出会いは「えっ、君っておもしろいねえ」という感じで、よりいっそう刺激的である。仲間とのつきあいの楽しさとは本当はこういうものである。キャンプは、過去の青年団活動に匹敵する新しい生活集団としての新しい教育効果を発揮してくれるのである。

過去の青年教育にも、日中の正式のプログラムが終

リティを探りたい。

mito公開講座への参加も、市民にとっては自己決定であるからこそ、受講者間に「産しのサンマ」が形成される条件下にある。(自著『産しの生涯学習』)

生だが、連絡をとって、違和感なくやっている。

ただ、コンピュータについては、教えてもらう相手がない。中小企業には最先端知識が必要ではなく、新しく出た安い商品はいかに使うかがポイントになる。

リカレントにも必要かもしれないが、それよりも基礎的なことが欠けている。具体的には数学、物理、国語などである。国語についていえば、工学部時代、ノートに写すだけであり、考察といっても、教師の提起した課題を解くという「考察」であった。しかし、実際の仕事では、課題というよりも問題を見つて、それを考察し、書かなければならない。これは自分の会社がたまたま提案型の仕事だったからかもしれない。彼は、基礎学力に欠ける新入社員のために、数回などの教科書をつくったことがある。

自身については、発想力、計画力が重要と考え、70万円の私費を払って、ビジネススクールの通信教育を今でも受けている。会社はそれをプラスとは考えていない。彼自身も自分の財産づくりにとらえている。これをしなければ、客への提案はできないと思った。そうしないと自分自身が枯れてくる。「会社のため」ではなく「自分のため」という気持ちである。ヤングフェスティバルについても、同様に「自分のため」と思っている。自分より若い人たちと共同で何かを作りあげるなかで、時代の風がわかるという。

(川田春夫さんインタビューまとめより)

げさだが大学開放の新しい段階を切り開くものとされている。

わって、夜、寝床で昼の議論の延長戦を行うことを寢床分科会と呼んで、その意義が注目されていたことがある。本音の交流ができるからである。この寢床分科会の意義も軽視できないと思うが、鉛筆のキャンパスは分科会の延長でさえもありえない。「寢床分科会だね」なんて言われても、鉛筆のメンバーはきょうんとしちゃうだろう。キャンパスにつき物のカラーライスではなく、汚いロッジの中だが、ちょっとおしゃれなフランス料理やスープをつくり、ワインなどで盛り上がる一方、個人がそれぞれ持ってきた「文化」や「生活」そのものがポツリポツリと出される。思いもしなかった他者の枠組に出会って、自分の枠組との違いに驚き、「おもしろい奴だなあ」と感じ、しかも、「そうか。わかる、わかる」と、それなりに共感してしまうのである。

人間は仕事や学業に追われる昼間より、夜のほうが自然体になりやすい。だからこそ、夜になると悪いこともしてしまうのだろうか。それはある意味では人間らしさの表れでもある。「人間らしさ」とは善と悪の混合体である。夜はそういう魔力があるから魅力的なのだ。(自著『産しの生涯学習』)

(3) 臨床的現実との出会い

平成11年度 私らしさのワークショップ 裏講座
第1回報告

実施日 1999年6月29日

大雨警報が出されたなか、Mさんが来てくれた。小人数ではあったが、ぼくとぼくの長男といっしょに、「芳水」を飲みながらしみじみ語り合った。Mさんの生い立ちや夫が亡くなってからの3年間のお話、人とのめぐり合いに関する考え方など、お仕事である掃除の話など聞いた。彼女は几帳面な性格なので、い

6 活動している人の大学開放への期待

(1) 活動とは異なる出会い—自分をつくらなくてよい

公開講座「私らしさのワークショップ」でまったく異なる出会いの体験

川田さんは本センターの公開講座「私らしさのワークショップ」を受講している。彼にとってはほかの体験とまったく異なる出会いであった。受講者の年齢が高く、それなのに元気であることに彼は衝撃を受けた。

ヤングフェスティバルなどの場では、たとえ許したくても許してはいけないなど、リーダーとして「自分をつくる部分」が必要だが、講座ではそれが無い。講座自体が、自分の気持ちをさらけ出す怖さを感じさ

(2) キーパーソンが生涯学習を学ぶ拠点として

国立大学の門をもっと外に向けてほしい

最近、国立大学の独立行政法人化、エージェンシー化への動きが急である。彼はいう。国立大学はお金がかからないから自分でも行けた。また、たとえ授業は40人が受けたとしても、5、6人で気軽に先生のところに遊びに行ったり、教えてもらったりすることができた。そのスペースもふんだんにあった。それが自分には楽しかった。サロンのように、教師と学生が同じ高さで接する機会をこれからも大切にしたい。

自分は本センターのスタッフが翻訳した『大人を教える』（文芸社）を読み、ほんとうに勉強になった。たとえば講師の姿勢、部屋の様子、入り口で迎えることなど、その姿勢は、ヤングフェスティバルや学遊塾でミーティングが煮詰まってしまったときなど、有効なアドバイスにつながった。大学教師は専門知識には優れているが、とくに工部は社会教育や生涯学習についての理解がない。人、とくに大人を教える場合は、それが重要になると思う。

また、社会教育や生涯学習についてセンターの教員とは話すことができるが、行政にはそのような相談相手がない。社会教育のこと、イベント、青少年団体などについて、人事異動が激しく、あまり知らない職員が多い。たしかに生涯学習という言葉は盛んに使われているが、自分の話が、とくに役所には伝わらないというもどかしい思いをもっている。

生涯学習についての勉強会をしたい。本センター教官から紹介されたメーリングリストでは、生涯学習についての議論が盛んにやりとりされている。話し合える人が全国規模だということ、徳島にも本当はいるのだろう。さちと社会教育や生涯学習を学んでいて活動している人たちの中核組織としての連絡会がほしい。そういうキーパーソンをセンターの8人の教官の専門性をいかしてフォローしてほしい。自分自身、センターの教官と出会う以前は、生涯学習によってこんなことができることは知らなかった。

30代の人たちで何かをしたい。何をすればよいかわからない。自分だけで考えている人などいるだ

ろいろと仕事を任されて大変だとぼくは感じた。

うれしいことに(夜遅くなのに強引に)お願いしたのですが(;)本センターのスタッフの心理学のK先生も同席してくださり、親が子どもに教える2つのこと、自立と自律についてや、「正しい自分である必要はないが、正しく自分であれ」という興味深い言葉について教わり(正確には未確認)、ぼくたちはいたく感動した。

しかし、自分も相手も気持ちさをさらけ出し、またフリースペースや裏講座などもあるので、とくに最初の秋講座では、5回だけで、そういう異年齢の人と数年先のつきあいをしているような感じになった。知識や技能を習うという目的だけでなく、ふつうの講義のように顔見知りになるころには終了ということがあってもよいかもしれない。しかし、それで友達をつくるということは、横のネットワークができて教えてもらえるということであり、大切なことだと彼は考えている。

ろう。その人たちがアクセスできる場になってほしい。

自分は徳島大学出身なので気軽に徳島大学に行けるが、そうでない県外出身者、高卒者、他大学出身者にとっては壁が高いと思う。それに対して、徳島大学大学開放実践センターは大学の外に向かって開かれているという実感があふれる。これを活かしてほしい。

徳島では青年層リーダーが元氣なようである。実際には40代以上に、「口先ばかりで行動しない」といって頭を押さえつけられている部分があると思う。そういうとき、センターのようなアドバイザー的な存在があれば、青年層の悩みも「口先ばかり」ではなく、より具体的にのめり込めるのではないかと。

また、起業については、県や市の補助金なしには、この不況下では不可能、理念などはいっているが、従業員に給料を払わなければ、という実態と雰囲気がある。起業家の若返りを図り、青年層(30代から40代)に設定するべきだと思う。徳島大学が起業のための発信をしてほしい。CATVなら放送枠にまだゆとりがある。CATVは、見る人はけっこう見ている。徳島大学の教員がニュースに出ることとはときとあるが、起業の件ばかりでなく、もっとシステムの地域に発信することを考えてほしい。

川田さんのようなおだやかで物静かな新しいタイプのキーパーソンが、大学開放にエールを送ってくれている。取材者としては、そのことを心強く思うとともに、こういう人たちの議論の場を提供し、学習支援を強めたいと感じた。

(ともに川田春夫さんインタビューまとめより) mito>国立大学開放機関としては、いわば「知的水平勉強会」によって、大学と市民の知的協働を進め、それをよりいっそう高次のものとすること、さらには国立大学の存在を自発的に支持する市民集団を形成することによって、迫りくる大学の「独立行政法人化」の嵐に向かう準備が必要であると思う。これによって、産官民の知的協働、さらには、それによってキーパーソンの拠点として、開放機関が新しい役割を発揮することが重要である。

7 アカデミズムとしてのリベラルアーツ

平成11年度 私らしさのワークショップ 春学期
第6回報告

実施月日 1999年6月22日

導入-授業は勝負だ

自分の書いた出席ペーパーの文中の「恋人同志」が前回、mitoに「恋人同士」と訂正されたが、辞書で調べたり、知識のある人に聞いてみたが、「恋人同志」も間違っているようである、という発言が参加者の一人からであった。ぼくは「間違っている」という書き順などはどうでもいいが、誤字は訂正したほうがよい」と答えた。その上で、教師に「かみつく」ことの大切さを評価し、その場合、子どもの辞書でもよいから調べて、教師の間違ひを指摘できる部分をコピーして示すなどの「もう一歩」があるところにはすばらしいとコメントした。

また、次の体験を披露した。「重複」を「じゅうふく」とぼくが発言したところ、ある学生が「ぼくは日本語を愛している。じゅうふくではなく、ちょうふくと読むのが正しい。教師として恥ずかしいことだ」と出席ペーパーに書いてきた。ぼくは悔しくて、辞書を調べてみたら、確かに「重複」の「じゅうふく」という読み方には×が付いていた。これも、授業の場では、「本人がじゅうふくと読みたいのなら、そう読んだっていいじゃないか」という話にはならないのである。

8 臨床的現実との出会い

(1) みんながって、みんないい。

「違うからよかった」というグループが、今回のカード式発想法で出てきたが、どうもこれは引っかけかかります。本当に違うのか？ 違うという言葉はどのような意味で使われているのか？ ぼくは違うからよいではなくて、「違う」の向こうにある「同じ」のゆらぎがよいと思う理由はないかなとも思います。何もかもまったく違う者は、理解も共感もできないのではないかと感じています。短くうまくまとまりませんがなんとなく疑問を感じたので。

(受講者の出席ペーパーより)

(2) 出席ペーパーシステム

これ(状況主義的自分らしさ)は出席ペーパーを提出する学生の多くが、ぼくから顔と名前が一致されないように希望することにも通じている。出席ペーパーは、あくまでもそれを書いているときの「いま、ここでの」自分の表現であって、それがぼくから「この人はこうなのだ」と誤解されたくないし、あるいは他の

状況でもそこに書いた「自分らしさ」が貫徹されているはずだ、などという無言のプレッシャーを他者から受けたくないのだろう。それだけに、出席ペーパーには虚偽や無理が少なく、本人の臨床的現実と迫るものが多い。

(平成11年度情報処理教育研究集会発表予定)

(3) 公開講座のワークショップ型への転換

ワークショップとは

(1) 作業場、(手工業的な)工場

(2) (小規模な)研究(集)会、研修会

をさす。これは一斉集団学習と学習という受動的学習方法の打破に通ずるものである。笑い声が絶えない、学習者自らがその気になる、などの特徴がある。

◆ 市民の潜在的学習欲求の顕在化のための学習内容・方法の開発を

数的に多くの市民がアンケートなどで学習したいと回答したテーマや、市民が実際に学習活動を行っているテーマを追うだけでは、市民の顕在的な学習欲求に後追ひ的に対応する結果にしかない。人びとが学習して初めてその学習の本当の魅力に出会えるようなチャンス、すなわち潜在的学習欲求の顕在化の場として機能することが、大学公開講座のこれからの課題である。

市民の高度化、多様化する学習ニーズを鋭敏にとらえるためにも、この潜在的学習欲求の重視の視点は欠かせない。潜在的学習欲求も視野にいれるからこそ、人間の学習ニーズは無限の可能性をもっているとい

えるし、大学も教育主体としての存在意義をもつのである。その方向は、大学公開講座の実施においては、先に述べたように、本来の高等教育の機能を、しかも、日々進化する生涯学習社会に適合したかたちで市民に提供する方向と一致すると思われる。

そのためには、学習者がより一層主体性を得ることができる方向での学習内容と学習方法の工夫が必要である。少なくとも一斉型学習と距離を置かなくてもいいような非主体的なマスプロ講義は最少限度にとどめるなどのセンスが求められている。このようにしてこそ、大学は、今後の生涯学習社会のなかでの高等教育機関としての自己の教育的力量が世間からも認知されるのである。(自著『癒しの生涯学習』) mitoワークショップは承り型から参加・参画型学習に転換するための大きな可能性をもっている。そして、ワークショップにおいては、出席ペーパーと同様に、一般社会と比べてかなり突動的臨床的現実の相互関与が行われるがゆえに、アカデミズムの新しい役割の発揮が期待できる。